

C 五郎沼と嶋の堂千手観音

五郎沼の歴史と自然

C⑦ 夜泣き石の伝説

五郎沼には、その名称の由来とされる樋爪五郎季衡に関する各種伝承のほか、この沼を舞台とした伝説や昔話が残されている。「夜泣き石」という伝承もその一つである。

我が国では、古くから山や森、岩などを神霊が宿る場、神が降臨する場として祀ってきた。巨大な岩を御神体として祀っている花巻市の丹内山神社もその一つである。

日本各地に伝承されている「夜泣き石」の伝説の中には、殺された者の霊が石に乗り移って泣き声をあげ、あるいは、石自体が怪音を出すといわれる伝説が多い。古くは、西大寺東塔の心礎に据えようとした大石が数千人の力でも動かず、石が時に唸り声をあげることが記されている（『続日本紀』宝亀元年〈770〉2月23日条）。

五郎沼東岸に、「夜泣き石」と呼ばれる供養碑がある。五郎沼は人為的に造成された沼であり、浸食や豪雨によってたびたび決壊することがあった。近世において、沼の修復工事がたびたび実施されたことは、寛政2年（1790）の五郎沼普請に係る代官への願書控や人夫の手配、資材の調達の覚書などによって確認できる（「御村諸用書留帳」『南日詰小路家文書』）。「夜泣き石」は、五郎沼の土手の決壊を食い止めるために、人柱にされた女性の泣き声が聞こえてくるという人身御供の悲しい伝説である。

五郎沼の土手がしばしば決壊し、地元の農民は苦しめられていた。水神の怒りを鎮めるため村では人柱を立てることにした。人柱として選ばれたのは、近くに住む農家の娘であった。この娘が人柱として土手に生き埋めにされたという。娘が埋められた土手には、娘の霊を慰めるために巨大な石が供養碑として建てられた。その後、土手の決壊はなくなり、尊い命を犠牲にして築かれた土手は満々と水をたたえていた。ところが、夜に供養石の近くを通ると、不思議なことに「しくしく」という悲しげな娘の泣き声が聞こえてくるようになった。この鳴き声が繰り返されるようになると、いつしか地元の人々は「夜泣き石」と呼ぶようになった。大正14年（1925）に浚渫事業が行われた際、夜泣き石は現在地に移設された。

人柱とは、人身御供の一種で、架橋・築堤・築城などの際に、神の加護を得るため、あるいは場所にまつわる穢けがれを祓はらうため、生贄いけにえとして人を土中や水底に埋める風習である。

柱とは、材木の柱ではなく、神を数える際の助数詞としての柱を指し、死者の霊魂を神に近い存在と考えているとされている。殉死もまた一種の人身御供とされる。

県内には泣き石の伝説が各地各様に伝えられている。遠野には、武蔵坊弁慶にまつわる「泣石」伝説が伝えられている。武蔵坊弁慶が支石墓（ドルメン）を作る際、笠石を乗せ

られた下の石が、「自分は位の高い石なのに、一生永代他の大石の下になるのは残念」と言
って、一夜中泣き明かした（柳田国男「遠野物語拾遺」第 11 話『遠野物語一付・遠野物
語拾遺』角川学芸出版）という内容である。

この遠野の「泣石」と同じような昔話が五郎沼にも伝わっており、遠野出身の民俗学者
佐々木喜善（1886－1933）の著作に採録されている。

「村人が南日詰蔭沼の地に金毘羅供養塔を建立する際に、五郎沼開削の際に土中から掘
り出された古碑をその土台石にした。当時、陣ヶ岡という著名な相撲取りがその石塔の前
を通ったところ、大入道が現れて相撲取りを取って投げつけた。次の夜もその石塔の前を
通ると、大入道に投げられた。相撲取りは、巫女にこの話を聞き合わせると、「俺は古より
仏の供養として建てられたが、久しく地中に埋められていた。今度は金毘羅の台石にされ
た。それが残念で堪らないから、どうか元の場所に戻して欲しい」。その後、現在の場所に
移された（佐々木喜善「鳥虫木石傳」『遠野の昔話』宝文館出版）。という内容である。

この昔話で出てくる古碑が、五郎沼の古碑と伝わり、「夜泣き石の伝説」の供養塔と考
えられている。

五郎沼と同じような人柱伝説は、岩手県金ヶ崎町西根の千貫石地区にも伝承されている。
19 歳の娘を銭で買い求め、石の唐櫃からひつに封じて牛もろとも生き埋めにしたとの伝承である。
人柱になった娘の霊を供養するため、観音像が建立されている（『金ヶ崎町史』）。

上越市には、旅僧が人柱となって地すべりを止めたという伝説がある。座禅を組み、珠
洲焼の大甕をかぶせた状態の「人柱人骨」（上越市指定有形文化財）が伝説そのままの状態
で出土し、史実であることが確認されたという。

五郎沼を舞台にした昔話である「お菊の水」（片寄のお菊）が地元で伝承されている。
五郎沼の主である大蛇が、志波郡の片寄中曾根に住むマタギ（猟師）の十兵衛に射ち殺さ
れた。その大蛇は、十兵衛のもとに娘となって生まれ変わる。成長したお菊は、その正体
が知られ十六の角をはやした大蛇に化身する。親子の縁を切ったお菊は、大暴風雨を起こ
して仙台領の保呂羽の山に飛び去った（平野直「お菊の水」『岩手の伝説』津軽書房）。

この「お菊の水」について、宮沢賢治の作品に「…むかし竜巻がその銀の尾をうねらし
たといふその沼…」、「…こゝはたしか五郎沼の岸だ…」など、五郎沼を舞台にした記述が
みられる。『春と修羅 第二集』所収の「産業組合青年会」の元となった「草稿的紙葉群」
と呼ばれる下書きに「五郎沼」が登場する（『【新】校本宮沢賢治全集』第 3 巻 詩[Ⅱ]校異
編 筑摩書房）。